

附錄

覺者新免武藏

附錄

新免武藏、普通所謂宮本武藏は、宗教上の稱なる覺者<sup>かくしや</sup>を以て呼ぶべき人であります。畫家は覺者に後光を描く。武藏の畫像にも、その圓く大いなる額、後にクワツと張り展げたる兩肩の上に赫耀たる光明を描くべきであります。

人の爲し得る一切の事、その事の何たるを問はず、皆八萬四千法門の一であります。如何なる法門より入るも、進み進んで息ま<sup>やす</sup>ずんば、光る人たり得るのであります。吾が新免武藏は劍を取つて人を殺す法の研鑽に全生命を擧げて従ひました。そして其劍道を法門と

して覺者となつたのであります。人間には有限界のみを知つて無限界は覗いたことも無い人が多い。又たまた無限界を知つてゐる人は、大抵有限界を蔑視して、その意義を認めることを得致しません。この無限有限兩界を一人にして透察し、その兩界實は一如たる事を得し、その一如の上に自由に行動する人が覺者であります。何人も崇拜すべきは斯人であります。大地をドツシ／＼と濶歩し得る人にして、しかも背上に強き翼あり地を離れて飛翔し得る人、斯人は實に世に出づること稀なものであります。新免武藏はこの稀なる人でありました。

『天下の豪傑宮本武藏』は餘りに多く世間に知られ過ぎました。舊劇に、講談に、新聞の續き物に、活動寫眞に、ニワカに、繰返し寫

されました。私はそれ等に武藏がいかにかに寫されて居るかを詳にしません。しかしその端々を人に聞く所によれば、途方途徹も無い全く別の人間になつて、居るのであります。『二天記』『五輪書』この二書を読めば、それ等俚俗武藏の姿は破碎されて、眞の武藏が凜々として現はれ來るのであります。二天記は武藏の事略で多く武藏の直話にかゝり、豊田正剛の未完稿を、子正修、孫景英の手を経て整へられたものであります。五輪書は武藏の著す所でありまして、その創建したる二天一流の秘を文字に現はされ得る限り現はしたるものであります。武藏の書いたものにはこの外、『獨行道』『兵法三十五ヶ條』などがあります。それ等は箇條書、斷片でありまして、最も組織立つて纏まつてゐるものはこの五輪書唯一つであります。そ

れも嵩高かさたかなものではありません。一夜を費せば容易に讀了し得るものであります。文字の量少しと雖も、盛る所の意の量は廣大無邊であります。その一字一言悉く彼が身を賭して得たる尊き一字一言であります。それは劍道と云ふ限られたる範圍内に收め置くべきものでは無く、いづれの道に當倏あひるも、徂ゆく所として可ならざる無き聖語であります。荻角兵衛昌國が『右の二書(三十五ヶ條と五輪書とを指す)心法の妙用を論ずる、神農家の心系の圖を見るが如く、實見實理精密用至、朱夫子大學或問の已後斯の如き精密の書は見及び申たる事は無御座候』と驚嘆して居るのは尤なことでありませぬ。

二

明治四十二年に宮本武藏遺蹟顯彰會が池邊義象氏に編纂を託し、全國に檄して材料を徴して成つた『宮本武藏』と云ふ一書は、武藏を知るに於て現時最良の書であります。五輪書、三十五ヶ條もこの中に收めてあります。それから二天記、及び、武業雜話、丹治峰均筆記等にある事項を輯め、なほ原田宣輔氏、長野一誠翁などの實地踏査所傳報告を組入れてあります。二天記の全部は肥後文獻叢書第二卷に收められて居ます。それから東洋哲學第二十一編第一號に井上哲次郎博士の『宮本武藏と武士道』と云ふ講演筆記が載つて居りま

す。なほ五輪書は吉丸一昌氏の校訂を経たものが國書刊行會から近く發行されることになつて居ります。井上博士は餘程前から熱心に武藏を研究して居られますから、そのうち何か纏まつたものを發表されることと思ひます。

私は唯以上舉げた諸書を見たゞけの知識しかありません。自らこれ等に無い事實を發見したのでも何でもありません。併しそれだけの知識で武藏は實によく私にわかつたのであります。不自由なる文字言語、幾重も包まれて居る各個人、そこに意志の疏通と云ふこと、一人が他人をわかると云ふ事はなかく有りません。私はこの世に甚だ稀に起る『わかる』と云ふ事を武藏に就て爲し得、彼の偉大を認め得たるに依つて、既に彼を寫した諸書の流布せるにも拘はらず、

更に私のわかつた彼を紹介し、彼をわかる人を一人でも多くしたいと思ふのであります。

武藏の家は祖父の代から美作國吉野郡竹山城主なる新免氏しんめんに仕へて居ました。祖父は平田將監と云つて、劍道及び十手じゅうての術に長じてこれを家の業とし、又新免氏の文武の師範となつて居ました。この將監が城主新免伊賀守宗貫むねつらから厚遇され、新免しんめんの氏を賜はつたのであります。將監の子は武仁と云ひ號を無二齋むにさいと云ふ。この人殊に十手に長じて、父の跡を嗣ぎ、同じく宗貫に厚く用ひられました。この無二齋は同じく吉野郡の宮本村に居た時、子武藏が生れたのであります。それは天正十二年のことであります。普通宮本武藏と云ふのはこの産地を呼ぶのであります。武藏は幼名を辨之助といひまし

た。武藏と云ふ名ももとは『たけざう』であつたのを、後に『むさし』と云ふやうになつたと申します。自ら改唱したのか、人が云ひ出したのか判然しませぬ。ともかく武藏國には些も關係の無い人でありませぬ。

三

武藏は幼年から聰明で、父無二齋の兵法の缺陷がよく目につき、それを包まず口に出してよく父を誹謗した。無二齋はこの爲にいたく辨之助を憎み、或時無二齋が楊枝を手づから削つて居たる際、何か武藏に對して怒るべき事があつたと見えて、折から一間を隔て、

居た武藏に、楊枝を削つて居た小刀を手裏劍しゅりけんにして打つた。武藏面をそむけ、小刀後の柱にグサと立つ。無二齋愈怒り、「日頃我が兵法をなみするは不埒至極なり」と更に手裏劍を打ちたるを、武藏又かはし、其儘家を遁れ出てしまひました。當時殺伐の世、殊に兵法の家では、父子の間にも斯くの如き寒さがあつたのであります。それから播州へ行つて、母方の叔父なる僧の寺に身を寄せました。其時九歳でありました。これも今日の人の状態から察したのみで虚構と云ひ消すことは出来ません。日本武尊は其の剛勇慧敏の爲に父帝の温かき愛に浴することを得給はなかつた。武藏も其の剛勇慧敏の爲に父無二齋に弾き出され幼より家庭外の人になつたのであります。まことに是れ然るべき天の運命であります。

さて辨之助十三歳の折、新當流しんたうりゅうの名人有馬喜兵衛へうまと云ふ者が播州に参りまして、濱邊に竹矢來を結び、金磨きんかの高札かうさつを立て、それに、仕合望しあひのぞみ次第致すと書きました。辨之助は手習の歸るさにこの高札を見て、面憎く思ひ、持つたる手習ひ筆で其文字を塗消して、其の裏に、斯く／＼の所に住む宮本辨之助明日仕合ひ致すと書きました。すると其夕方喜兵衛から寺へ使が来て、御望みの如く明日仕合致すべく候と云うて來ました。叔父なる僧は驚いて、たゞ子供の惡戯わるさ故許して下されと使に頼みました。使の者は自分一個では取計らはれぬ故主人に直接に頼めと云ひました。それで僧は其使に跟いて喜兵衛の旅宿を訪ね、右の旨を頼みましたところが、喜兵衛申すには、それは尤なる事ながら、播州で高札に墨を塗られたとあつて

は拙者の面目が立たぬ、ともかく明日場所まで辨之助を同道して來て、見物の前でその事を仰せられよ、さすれば幼年のわるさと云ふ事ひろく世間にわかり、拙者の面目にも拘はるまいと云ひました。僧は先づ安心して歸り、辨之助をしみ／＼戒め、その翌日同道して場所へ行かうとする時、辨之助は『よしもなき骨折をせらるゝもの哉』と云つて、脇差一本をさし、縁の下の薪の中から棒を一本取出しそれを杖について僧に従つて行きました。喜兵衛はすでに矢來の中に待つて居て、見物の群集は山の如くであります。僧、喜兵衛に向ひ、昨夜も申し上げたる如く、幼年のことなれば仕合はひらに御免下さるべしといふ時、辨之助矢來戸押開やらいとき、『喜兵衛とは其方そのほうか、いざ仕合せう』と聲をかけ、走りかゝつてかの杖を持つて打つけま

した。喜兵衛も立上り拔打ぬきうちに切りかゝる。暫く闘ふうち、辨之助杖  
うち棄て、かいくゞつて組みつき、喜兵衛を倒し、杖取り上げさま  
十四五打續けたので、喜兵衛は即死致しました。この時武藏は我命  
を棄て、踏込めば必ず敵に勝てるものとの信念を得ました。それで  
程なくこの寺を去つて武者修行に出たのであります。この事は講談  
にもあるさうであります。池邊氏はこの事を疑つて居られますが、  
十三歳の時馬喜兵衛と云ふ兵法者に勝つたのが初めての勝負だと  
云ふ事は五輪書の自序にも明記して居る所で、その事の詳細を記し  
た丹治峰均筆記のこの記事はみだりに抹了すべきものではありません。

## 四

それから十六歳の時に但馬の秋山某と仕合したと云ふ事も自ら記  
して居ますが、その事の記述は物に見えません。

この喜兵衛、秋山との仕合を手始めとして、諸國にて仕合を爲す  
こと實に六十餘度に及びましたが、一度も敗を取りませんでした。  
當時の仕合は命がけの仕合でありました。敗けた者は死ぬるか又は  
不具者になつたのであります。武藏は真劍又は木刀を使ひました。

武藏は劍道の外に兵學を甲州流の北條氏長に學びました。豊臣方、  
徳川方と天下が二つに分れた際、武藏は新免氏に従つて西軍となり、



關ヶ原の役にも參加しましたが、大勢は如何ともすべからず、西軍破れ新免氏は悲運に陥りて筑前に赴き、武藏もともに其方へ行きました。天下徳川に歸してよりは武藏は愈よ流浪生活を續けました。強者武藏が豊臣氏が目前に滅亡したつたあとを見送りました其の感慨は、彼の一生に云ひ難き情調を出だして居ります。

さて寛永十一年に至つて縁あつて小倉の小笠原忠真公に仕へ十七年に熊本に移つて細川越中守忠利公に仕へました。忠利公は實に武藏の爲に知己でありました。武藏は十八年二月に公の爲に『三十五ヶ條』を書いて奉りましたが、其翌月公薨ぜられてからは、詩歌書畫工藝に靜なる日を送りました。そして寛永二十年十月に大著『五輪書』を記し、其翌々正保二年の四月十九日に歿しました。享年六十

二であります。骸は飽田郡五丁手永弓削村の地に葬りました。今の飽託郡内で、熊本市の東北二里ほどの立田山と云ふ丘の下にありたり、少しく樹木のある所に武藏塚と呼んで居る簡単な墓があります。墓面には唯『新免武藏墓』とあるのみであります。

武藏がこの世に齎した効果の最も主要なるものは兩刀を使ふ法の創建であります。彼は自ら之を二天一流と唱へました。傳説によれば、武藏幼年父のもとに在る頃荒牧あらかまきの神社に遊んで、太鼓を打つ有様を見、二本の撥のともに音同じく決して右の撥の音左に勝らざるを感じたのがこの流鍊磨の始めだと云ひます。この二刀を使ふことに就て武藏曰く、

『此道二刀として太刀を二つ持つ。左の手にはさして心無し。太刀を

片手にて取習はせん爲なり。』

兩方に氣を分けず、片手で使ふと云ふ事を主眼とせよと教へたのであります。『さして心無し』と云ふ言に親切な教意が溢れて居ります。又曰く、

『太刀を兩手に持ちて道を仕習ふ事實の所也。一命を捨つる時は、道具を残さず役に立てたきもの也。道具を役に立てず、腰に納めて死する事、本意に有るべからず。然れども兩手に物を持つ事左右共に自由には叶ひ難し。太刀を片手に取習はせん爲なり。』

ベストを盡して倒れない、二本さしながら唯そのうちの一本を兩手に握つて振廻したゞけでは死ねない、との意であります。全力を舉げて事を爲る、二本あるこの手で二本の刀を操る、と云ふのであ

ります。併しかの子供の遊びの片手握にぎりこぶし拳で縦に叩き片手開いて横に磨する事の互に紛れ誤り易さが如く、兩手を一緒に働かすと云ふ事は却つて弱くなつて危険である。こもく働かすと云ふ意でありませう。又曰く、

『刀脇差かたなわきざしに於ては、いづれも片手にて持つ道具なり。太刀を兩手にて持ちてあしき事、馬上にて惡し。駈け走る時惡し。沼池石原さかしき道人ごみに惡し。左に弓槍を持ち、其外何れの道具を持たんも、皆片手に太刀を使ふものなれば、兩手に太刀を構ゆる事實まことの道に非ず。若し片手にて打殺し難き時は兩手にても打込うちこむべし。手間の入る事にても有るべからず。』

こゝには片手で刀を使ふと云ふ事は決して不自然の事では無い、

實際片手で使はねばならぬ場合が多い。それに両手でなくては刀が使へぬと云ふ習慣になつて居ては、それこそ不自然な習慣で、甚だ危い、と云つたのであります。とは云ふものゝ片手では力が足りなくて、切り得ても最後の一撃にはならぬと思はれた時には、一方の刀を棄て、両手の力を一刀に籠めて打込んでも、もとより悪くない、何もそこに非常な手数を要するのでは無い、臨機應變で無くてはならぬ、と云ふのであります。両手で一刀を使ふと云ふ事は不自然な事ではあるが、徹頭徹尾両手ではいかぬと云つては居りません。この不拘泥變通自在の主張に武藏の武藏たる所が現はれて居ります。

## 五

さて彼が六十餘度實地に當つて其法を用ひた其有様を一々は存じませんが、そのうち二つの仕合をお話致します。この兩仕合共に武藏の人格が生きくと出て居るのであります。

其一つは二十一歳の時のことでありました。彼が京都に行き、將軍家兵法の師範役なる吉岡清十郎に仕合を求めました。清十郎は眞劍、武藏は木刀で立合ひました。一撃の下に清十郎は絶息致しました。門人等板に載せて歸つたが、幸に蘇生しました。しかし面目無いと云ふので出家して了ひました。すると清十郎の弟の傳七郎と云

ふ大方の男が、兄の恥を雪がんとて、今度はこちらから武藏へ仕合を申込みました。立合になつた。傳七郎は五尺餘の木刀で向つたが、武藏忽ちこれを奪ひ、此方からしたゝかに撃据ゑた。傳七郎は即死致しました。吉岡家では重ね／＼の不首尾を口惜しく思ひ、門弟等評議を致して、清十郎の子又七郎を押立て、仕合を申込み門弟大勢加勢すると云ふ手筈にしました。場所は京都の東北一乗寺藪の郷、下り松のほとりと相約しました。武藏の門弟等はそのやうに敵が大勢ではいかに武藏鬼神なりとも危いと思ひ、我々も加勢に出ませうと申出た。武藏は一切これを退けて獨りで場所へ赴きました。まだ夜は明け切りませんでした。一乗寺へ行く道に、八幡の社があります。武藏はこの社の前に來て、今日は敵が大勢だから、幸ひこの社

へ勝利を祈つて行かうと思ひまして、社壇に上り、鰐口の緒を取り、鳴らさんとして、ハツと氣が付いて、緒を離した。なぜ祈願を止めたか。日頃武藏は、『神佛を尊み、神佛を頼まず』

との義を把持して居ります。彼の書きました十九條の『獨行道』の中にもこれを一條に立ててあるのであります。それを不圖忘れんとしたので自ら驚き、祈らずして直ちに社壇を下り、一乗寺下り松に參りました。

まだ敵は來て居りませんでした。一體武藏は仕合の時に遅刻をする癖のある人でありませぬ。この遅刻と云ふ事が彼の術の一つであつたかも知れませぬ。敵の勢の張切つたのが稍弛んだ所へ行くと云ふ

謀であつたかも知れませぬ。清十郎の時も傳七郎の時も彼は遅刻致しました。そこで今度も遅刻だらうと敵が思つてゐる豫想を外して、この日は又馬鹿に早く出かけたのであります。まだ夜明に間があるのでは彼は松の下で暫く休んで居りました。すると提燈の影がいくつもチラチラと近づいて來ました。それは又七郎と門弟等の一團であります。やがて近づくと、又七郎が「武藏は今日も遅いであらう。暫くあの松かげで休まう」と云ふのが聞えました。

其時直ちに、「又七郎待ちかねた」と云ひ様、武藏は真劍を振つて躍り出ました殆ど打合ふ間もあらせず又七郎は真二つに斬殺されました。門弟等は様々得物を振つて一人の武藏を取圍み、或者は半弓まで用ひましたが、それを一人で悉く追崩し僅に袖に矢一筋を留め

ただけで、身に微傷だも負はず大勝して歸りました。吉岡家はこれで斷絶して了ひました。

## 六

『獨行道』と云ふのは彼の自戒であります。即ち、

- 一、萬づ依怙の心なし
- 一、身に樂をたくまず
- 一、一生の間欲心なし
- 一、我事に於て後悔せず
- 一、善惡につき他を妬まず
- 一、何の道にも別を悲しまず

- 一、自他ともに恨みかこつ心なし
- 一、戀慕の思なし
- 一、物事に數奇好みなし
- 一、居宅に望なし
- 一、身一つに美食を好まず
- 一、舊き道具を所持せず
- 一、我身にとり物を忌むことなし
- 一、兵具は格別、餘の道具たしなまず
- 一、道にあたつて死を厭はず
- 一、老後財寶所領に心なし
- 一、神佛を尊み神佛を頼まず
- 一、心常に兵法の道を離れず

この十九條であります。小慾を全く除き、心醇乎じゆんことして純に、自

然の道に背かず、どこまでも獨りで遣通やりとほすと云ふ高く潔き而して至強の人格がそこに淡々水の如くにも又烈々火の如くにも現はれて居ります。就中『後悔せず』の條と『神佛』の條とは私の最も尊む箇條であります。活きた人であります。絶えず動き進み行くのであります。何の違あつてか過去の行程を思念せむ。一切の行、其時然るべからざる故あつて爲したのである、後悔は益なくして、却つて行進に害を爲すものであります。『神佛』の條は、今日の多數の人にあつては何でも無く考へられるかも知れません。僕等も神佛は頼まないよと云ふ人が多いかも知れません。しかしそれは今日の多くの人は神佛の存在を否定して居るからであります。時代が違ひます。殊に武藏は神佛の存在を信じた人であります。已に神佛在り、その神佛は人

の祈願を納れて、絶大の力を以て其人を助ける、と信じつゝ、それに依頼せぬ。自分の事は自分だけで遣ると云ひ、それを實行した武藏を思つて御覽なさい。今日の多くの人は神佛の前に頭を下げぬが、事ある毎に他の人の前に禮拜します。獨り道を行く人は實に少いのであります。『神佛を頼まず』何と云ふ壯烈の心ぞ。しかもなほ『神佛を尊み』と云つて居る慎重穩和の程、彼の人格は過半この一條に現はれて居るとも云へるものであります。下り松の仕合の時思はず彼はこの自戒を破らうとした。彼はこの時の事を後に人に告白して『かの時、慚愧汗流して踵に至れり。事に蒞んで心を變ぜざる事難し』と云ひました。眞摯の人であります。

## 七

慶長十七年四月に、武藏、豊前の小倉に参りました。當時の太守は細川忠興でありました。そこに巖流佐々木小次郎と云ふ劍道者が抱へられて居ました。この小次郎も武者修行をして一度も敗を取つた事のない傑物でありました。武藏はこの小次郎と仕合がして見たいと思ひ、武藏の亡父の門人で今この細川家の家老をして居る長岡佐渡守と云ふ者に頼んで、この事を太守に願ひました。講談にあるやうな他の理由があつての仕合ではありません。唯當年の劍道者は、傑物と聞けば其人と仕合をして優劣を定めむとの心勃々として禁ぜ

ざるのであります。大守は此願を許可致しました。仕合の場所は豊前と長門の間の海にある船島一名向島と定められ、諸人の最見見物を禁ぜられました。この島は小倉から舟行一里の處にあります。佐渡守は武藏に、明日辰の上刻(午前八時)に船島に向はれよ、佐々木は大守の船で行く、貴殿は拙者の船で行くことになつて居りますと通知しました。

すると其晩武藏が行方不明になりました。佐渡守は面目を失ひ、ひよつとしたら流石の武藏も、小次郎の技倆に恐れをなして逃げたのではあるまいか、と一旦は思ひましたが、併し彼がまさか其のやうな卑怯な事もすまいと、方々へ飛脚を立て、探させました。そしてやつと武藏が海のみかうの下ノ關の船問屋小林太郎左衛門方に居

ると云ふ事を附止めました。武藏はその探しに來た飛脚に、佐渡守あての手紙を托しました。其文意は、私は私の船で行きます、私は大守の御抱への敵になるのですから、貴方の船で送られては貴方が主君に禮を御缺きになることになります。明日はこの下ノ關から島に向ひます、と云ふのであります。佐渡守はその手紙を受けて大に安心致しました。

さて翌日になりましたが、日高くなるまで武藏が起きません。亭主太郎左衛門は氣が氣でないので起した。そこへ飛脚が來て、もはや佐々木殿は場所へ出て待つて居られます故早く御出でなさるやう、と申した。武藏は程なく參りますと返事を致し、ゆる／＼と手水を使ひ、飯を食ひました。飯を食ひ了つてから亭主に向ひ、どう



か舟の櫓を一挺下さいと云ひました、然るべきのを與へると武藏はそれを削つて、それで今日の仕合に使ふべき木刀を製造し始めました。

八

そこへ再び飛脚が来て催促しました。武藏木刀を造り了り、絹の袴を着、手拭を帯にはさみ、その上に綿入を着、小舟に乗つて漕ぎ出しました、漕ぎ手は太郎左衛門の僕であります。武藏はそれから船中で長い紙捻こよりを捻り、綿入を脱いで、袴を今の紙捻で襷がけに致し、それから脱いだ綿入を上へ被つて長々と横になりました。

船島に着きましたのは、巳の刻過ぐる頃(午前十一時過ぎ)でありました。武藏船中に立ち、綿入を脱ぎ、刀は船に残し、短刀のみを差し、裾を高くかゝげ、彼の先刻製造したる木刀を提げ、素足にて岸に上り、波打際を歩みつゝ、帯にはさんだ手拭を取つて鉢巻を致しました。

小次郎は猩々緋の袖無羽織、染革の裁附たつひを着し、草鞋を穿き、備前長光の三尺餘りの刀を差して、待ちに待つて居ました。武藏の姿を認むるや、憤然として水際に進み、何故斯く遅刻致したか、怯れおそたか、と云ひました。

武藏は答へませんでした。小次郎は益々怒り、刀を抜き放つて、鞘を海に投棄てました、この鞘を海に投げたのは、そこらへ投げた

のが偶然海へ落ちたのか、或は憤怒の餘り、行動が自然烈しく、地に投げてもよいのを、華々しく海にまで投出したのか、地に投げずとも腰にしても可さうであるが、身軽になつて一生懸命に掛からうとしたのでありませうか。いづれにしてもこの行動は常を失つて居りました。この時武藏、波打際に踏留まり、莞爾と笑み、『小次郎負けたり』と云ひました。小次郎『何が故に』。武藏『勝つなら鞘が要る筈ぢや』。小次郎毛髮逆立つばかり怒り哮り、刀を眞甲に振りかざして武藏の眉間を打つた。同時に武藏も小次郎の頭を目がけて打込んだ。武藏の鉢巻の結び目が小次郎の切先に觸れ二つに切れてハラリ落ちたのと、小次郎が頭を打たれて倒れたのと同時でありました。勿論武藏の方が少し遅れたのですが、しかし小次郎の刀が手拭を切

つて更に肉に切入るだけの時間は與へなかつたのであります。

## 九

武藏木刀を提げつゝ、倒れたる小次郎を見詰めて居りました。武藏更に木刀を振上げて打下ろさむとする時、小次郎伏したるながら横に拂つた。武藏の袷の端折の膝の上に垂れた所三寸程切れた。そして武藏の打込んだ木刀に、小次郎は肋骨を碎かれて氣絶致し、口鼻より血を出しました。武藏木刀を棄て、手を小次郎の口鼻にかざし、顔を寄せて死活を窺ひました。死んだと云ふ事が明かになつたので、彼は遙かに檢視に一禮し木刀を取り、船に行き、飛び乗つて

自分も助け漕ぎ、サツサと下ノ關に歸り、そこから佐渡守に禮狀を出しました。これからこの島を巖流島と云ひます。

武藏のした仕合の中、これ程猛烈な敵に合つたことは他にありませんでした。武藏は大抵一撃で敵を倒して居りますが、この時は二撃を加へて居ます。そして額の鉢巻が切れ着物の裾が切れたのであります。

この時も武藏は甚だしく遅刻して居ります。武藏が其朝になつて急に木刀を製つたり、船で紙捻を捻つたりしたのは、或人は彼には目前の仕合ぐらゐ何ともなかつたのだ、と解釋されるが、私にはさうは思はれませぬ。この時の如きは小次郎を随分重く見て居つたので、この仕合を容易ならぬ仕合と思ひ、それ故わざと行方不明にな

つたり、又甚だしく遅れて、敵の心を動かせ、平均を失はせたのでありませう。急に櫓で木刀を製つたのは、いろ／＼敵の様子、場所の様子を考へた末どうも有合せの木刀では工合が悪いと思ひ定めて、この仕合に適當なるべき木刀を製つたのでありませう。又一方には細工事さいくごとをして己が心を落着かせると云ふ心もありましたらう。船中の紙捻こより捻りなどは確にさうであつたらしいのです。彼の仕合は、敵に對ふだけでなく、まだ敵と會はぬ時から仕合を始めて居るのであります。

その後、正月三日の夜のこと、細川家御花畠おはなばたけの邸に於て謠初みきりの砌武藏も列座しました。まだ式の始まらぬ前、みな小聲で話をして居りました。志水伯耆守しみつが大組頭でありましたが、上座より武藏に、『貴殿先年巖流と勝負ありし時、巖流先きに打ちたる由風説あり。其通りの様子にありしや』と尋ねられた。武藏とかくの言葉なく、立つて燭臺を取り、伯耆殿の膝もとにズカと坐し、『我れ幼少の時蓮根と申す腫物はれもの致し、其の痕ありて月代なり難く、惣髪で居ります。巖流と勝負の時は、彼は真劍我は木刀。真劍にて先きを打たれしなら

ば疵跡あるべし、能く御覽あるべし』と、左の手にて燭臺を取り、右の手にて髪を掻き分け、頭を顔に突付けました。伯耆殿は後に身を反らし、『疵見え申さず』と云はれた。武藏なほ『しかと御覽あるべし』と申す。伯耆殿『成程とくと見届け申したり』と云はる。其時武藏立つて燭臺を直し、もとの座に歸り、髪を撫で整へて常に復しました。この間一座シンと致して諸士まことに手に汗を握り、鼻息する者も無かつたと云ふことでもあります。

武藏の『三十五ヶ條』の中に、

『兵法に身構みかまへあり。太刀にも色々構を見せ、遅く見え早く見ゆる兵法、是下段と知るべし、又兵法こまかに見え、術をてらひ、拍子能き様に見え、其品さゝ在て見事に見ゆる兵法、是中段の位也。』

上段の位の兵法は、不强不弱、かどかどしからず、早からず、見事にも無く、悪しくも見えず、大に直すにして、静に見ゆる兵法、是上段也。能くく吟味あるべし。』

とあります。この三段の別ちは、世上何の道にもあることでありま

す。

同書に『二つの足と云ふ事』と云ふ條があります。曰く、

『二つの足とは、太刀一つ打つ内に、足は二つ運ぶものなり。……太刀一つに足一つ踏むは、居付はまる物也。二つと思へば、常の足也。能くく工夫あるべし。』

片足踏みは、體を静止せしめる。静止すると打たれ易い。足は絶えず動の勢を取つて、直に進むべく、直に退くべくして居れ、と云

ふのであります。

一一

『三十五ヶ條』は五輪書の抜書とも見られるものであります。それにあることは大抵五輪書に入れてあります。五輪書は地水火風空の五卷に分れて居ります。この書は高弟寺尾勝信におくつたものであります。この書の卷頭に自序がありますがこれは自傳とも云へるものであります。即ち次の如きものであります。

『兵法の道、二天一流と號し、數年鍛鍊の事、初て書物に書き顯はさむと思ふ。時に寛永二十年十月上旬の頃、九州肥後の地、巖殿

山に上り、天を拜し、觀音を禮し、佛前に向ひ、生國播磨の武士  
新免武藏藤原玄信、年積りて六十、我れ若年の昔より兵法の道に  
心をかけ、十三歳にして初て勝負を爲す。その相手新當流の有馬  
喜兵衛といふ兵法者に打勝ち、十六歳にして但馬國秋山といふ強  
力の兵法者に打勝ち、廿一歳にして都に上り、天下の兵法者に逢  
ひて數度の勝負を決すといへども、勝利を得ずといふことなし。  
その後國々所々に至り、諸流の兵法者に行逢ひ、六十餘度まで勝  
負すといへども、一度もその利を失はず。その程年十三より二十  
八九までのことなり。三十を越えて跡を思ひ見るに、兵法至極し  
て勝にはあらず。おのづから道の器用ありて、天理を離れざるが  
故か、又は他流の兵法不足なる所にや。その後猶も深き道理を得

ひと、朝鍛夕鍊して見れば、おのづから兵法の道にあふこと、我  
五十歳のころなり。それより以來は尋ね入るべき道なくして光陰  
をおくる。兵法の利にまかせて、諸藝諸能の道となせば、萬事に  
於て我に師匠なし。今この書を作るといへども、佛法儒道の古語  
をもからず、軍記軍法の古きことをも用ひず、この一流の見立實  
の心をあらはすこと、天道と觀世音とを鏡にして、十月十日の夜、  
寅の一點に筆を把りて書き初むるものなり。』  
嚴肅莊重の文章、讀了一道の氣全身を透し、肉悉く締りて、一種  
の顫動を覺えます。六十餘度勝つて、勝つ其事のみに満足せず、我  
が天才の自然に任すに安んぜず、確と法を知り、自覺せる勝法を握  
らむと努力し、遂に其目的を達したのであります。こゝにある通

り、彼は兵法は兵の法のみには止まらず、『真』は萬法の祕である事をよく知つて居りました。私は讀者諸君にお勧めする、身に惰氣生じて業滞らむとする時、端坐して五輪書を讀み給へ。少くもこの五輪書序を朗讀し給へ。開戦の鉦鼓轟き、思はず肩開き四肢張るが如き概があります。

一一

地の卷に、死を恐れぬと云ふ事が武士の心の終局では決して無いと云ふ事を記して居ます。曰く、

『大かた武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬると云ふ道を嗜む

事と覺ゆる程の儀也。死する道に於ては武士ばかりに限らず、出家にても女にても百姓以下に至るまで、義理を知り恥を思ひ死すべきを思ひきる事は其差別なきものなり。』

同卷に又、士農工商それごとく同じ理によつて事を成しつゝあるのだと云ふ考へが見えて居ります。

同卷に曰く、

『劍術一通の理さだかに見分け、一人の敵に自由に勝つ時は、世界の人に皆勝つ所也。人に勝つと云ふ心は千萬の敵にも同意也。』  
水の卷、『兵法心持の事』の條下に曰く。

『兵法の道に於て、心の持ちやうは常の心に替る事なかれ。常にも兵法の時にも少も變らずして、心を廣く直にして、きつく引つ張

らず。少しもたるまず。心のかたよらぬやうに、心をまん中に置きて、心を静にゆるがせて、其のゆるぎの刹那もゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。』

こゝに説く所は動靜一致の状態であります。この『心のゆるぎ』の事、何人もよくく味ひ各々の肉的经验を綿密に調べて悟るべき事であります。

同卷、『兵法の目付と云ふ事』の條下に曰く、

『遠き所を近く見、近き所を遠く見る事兵法の専也、敵の太刀を知り、聊か敵の太刀を見ずといふ事兵法の大事也。』

目前に動く物象に引かれず、それを措いて、其物象の核心を見詰めよ、との教であります。核心を破却すれば、物象破却せられざる

無き理であります。武藏は目を二種に分けて、『観の目』『見の目』と云つて居ます。観の目は心眼であります。見の目は肉眼であります。『太刀を知る』とは太刀を観ることであります。太刀を見ぬとは、見の目を使はぬ謂であります。尤も全く使はぬと云ふのではありません。こゝは明晰ならしめむ爲に斯く云ひ切つたので、他の條には『観の目強く、見の目弱く』など云つて居ります。

同卷『有構無構の教の事』の條に構など云ふことは、時と場合で無限に變化さすべきものである、構など云ふものを一定してはならぬ、と教へて居ります。曰く、

『上段も時に随ひ少しさがる心なれば中段となり、中段も利により少しあぐれば上段となり、下段も折にふれ少しあぐれば中段とな



る、兩脇の構も位により少し中へ出さば、中段下段ともなる心なり。然るに依て構は有りて構は無きと云理也。」

同卷末節に曰く、

『此一書の内を一ヶ條／＼と稽古して敵と戦ひ、次第／＼と道の利を得て、不斷心に罹りいそぐ心無くして、折々手に觸れては徳を覚え、何れの人とも打合ひ、其心を知つて、千里の敵も一足づゝ運ぶなり。緩々と思ひ、此法を行ふ事武士の役也と心得る也、今日は昨日の我に勝ち、あすは下手に勝ち、後は上手に勝つと思ひ、此の書物の如くにして少しも脇の道へ心のゆかざるやうに思ふべし。』

急がずして、一歩づゝ、永き役と思つて進み行く。何事も上達の

秘訣は、この不倦、この熄まざる進行の外に無いのであります。

一三

火の卷、『枕をおさふると云ふ事』の條下に曰く、

『敵何事にも思ふきざしを、敵のせる内に見知りて、敵の打つと云うつのうの字のかしらを押へて後をさせざる心、枕をおさふる心也。……敵我にわざをなす事につけて、役にたゞざる事を敵にまかせ、役にたつ事をばおさへて敵にさせぬ様にする所、兵法の專也、是も敵のする事をおさへむ／＼とする心後手也。』

こゝは機先を制すると云ふ事を、彼の獨特の云ひ方で現はし、更

に突き詰めた所を示したのであります。しかも次に、「之も敵のする事をあさへむく」とする心後手也』と注意して居ます。こゝが何も彼も遣抜いて来た人で無くては、云へぬ所であります。敵のする所を機先を制して、グツと抑へて爲せぬやうにせねばならぬ。しかし『抑へようく』と抑へると云ふ其事に心を集注すると危い。こちらが後手になる。敵の爲す跡をく〜とこちらが跟いて行くことになるこゝでと云ふのであります。俳人の鬼貫は、俳人は『まこと』を云ふべきであるおにつらと云ひました。しかし鬼貫は斯う云つておいて更に『いつはりを除きてまことをのみ云ひ述べむと、力を入れて案じ侍るはいつはりいふにまさりたれど、これも又まことを作りたる細工の匂にて侍り』と云つておくことを忘れませんでした。武藏のこゝの注意と同

じ消息であります。

同卷『劍をふむと云ふ事』の條に曰く、

『敵の打出す太刀のあとへ打てば、とたん〜となりてはかゆかざる所也。敵の打出す太刀は、足にてふみ付くる心にして、打出す所を勝ち二度目を敵の打得ざるやうにすべし。踏むと云ふは足には限るべからず、身にても踏み、心こゝろにても踏み、勿論太刀にても踏み付けて、二の目を敵に能させざるやうに心得べし。是れ則ち物毎の先の心也。敵と一度にといひて行き當る心にてはなし。其儘あとに付く心也。』

こゝは、敵が打込んで来たなら、それを妨げず打込ませて、それを踏みつけて、改めて此方から打込むやうにせよとのことでありま

す。武藏の兵法は、敵とせりあふことを避け、唯こちらから能動的に打込むと云ふ事なのであります。

一四

更に進んでは、敵が打たせじと思ひ、我が打たむと思ふやうに、敵と我と反したる意を持つので無く、『敵も打たさむとし、我も打たむと思ふ時、身も打つ身になり、心も打つ心になつて、手はいつとなく打込む』と云ふ『無念無想の打』と云ふ界がある事を彼は説いて居ます。

更に、敵と我と云ふやうに、さう云ふものを感じぬ界がある。武

藏自らはこの界に到り、この界に於て敵を破つたのであります。彼かつて門人に、

『我は太刀取て立出づる時は、我も無く、敵も無く、天地を破る見地なれば恐るゝ所無し。』

と云つた事があります。

五輪書の最後、空の巻に至つて道の窮極、道の眞諦を述べて居ります。こゝに至つて五輪書は最高調に達して居ります。曰く、

『二刀一流の兵法の道、空の巻として書顯はす事、空と云心は物毎の無き所、知れざる事を空と見立つる也。勿論空は無き也。有所を知りて無所を知る是則空也。世の中に於てあしく見れば物を辨へざる所を空と見る所、實の空に非ず、皆迷ふ心也。此兵法の道

に於ても、武士として道を行ふに士の法を知らざる所、空には非  
ずして、色々迷ありてせむ方無き所を空と云ふなれども、是實の  
空にはあらざる也。武士は兵法の道を確に覚え、其外武藝を能く  
つとめ、武士の行ふ道少しも暗からず、心の迷ふ所無く、朝々時  
々に怠らず、心意二つの心をみがき、觀見二つの眼をとぎ、少し  
も曇り無く、迷ひの雲の晴れたる所こそ、實の空と知るべき也。  
實の道を知らざる間は、佛法によらず世法によらず、おのれく  
は慥なる道と思ひ、よき事と思へども、心の直道よりして世の大  
がねに合はせて見る時は、其身々々の心のひいき其目々々のひず  
みによりて、實の道には背くものなり。其心を知つて直なる所を  
本とし、實の心を道として、兵法を廣く行ひ、正しく明らかに大

きなる所を思ひ取りて、空を道とし、道を空と見るべき也、空有  
善無惡、智は有也、利は有也、道は有也、心は空也。』

一切を知了して空に至つたる是眞を把したる人であります。其空  
は充實の充實であります。此空の心を以て一切の有に應じ、千變萬  
化の有行を現するのであります。武藏の兵法は形而下と形而上とを  
自由に出入して居ます。そしてそれは机上の空論で無く實行に現じ  
て生死の界に在つてこの哲理を身に行ひ劍に働かせたのでありま  
す。

劍の聖なる武藏は、又禪を修し、書を能くし、畫を能くし、美術的  
の彫刻、實用的の細工をも能くしました。その畫の如きは専門家の  
間に立つても、驚くべき高い界に到つて居ります。故岡倉覺三氏も

かつて武藏の畫を見て嘆賞されたことがあります。武藏は恰も聖徳太子、空海等の如き類型の人物で一路の突當りまで行つて、萬路に通じ得た人であります。

一五

武藏は恐ろしく大きい鋭い目を有つて居ました。髪は壯年の時は帶の邊まで長く伸ばして居たと云ひますが、大額おほびたいの畫像のある所を見ると、後には月代さかゆきもしたのか、或は前額禿したのかも知れませんが。そして意外なのは衣服で、縹子の小袖に紅裏もみうらを着け、しかも足の甲に垂るゝ程ゾロリと長い着物を着て居たのであります。

又ふとしてはこれも意外に思はれるのは、彼が平素極めて物靜かな人であつた事であります。連歌の會などの時、次の間に居る者等は他の人々の聲を明かに聞き得ても、武藏の聲だけは極めて低いので聞きとれなかつたと云ふことです。その靜な武藏が、門人と立合ふ際、二刀を取り大太刀を杖につき、肩をクワツとくつろげる時、小河權太夫の如き剛の者さへも肝にこたへて、踏掛けた足を一足は必ず引いたと云ひます。

武藏に關した逸事はいろいろありますが、出羽國正法寺ヶ原で奇童伊織（武藏の養子となつた者）に會つた時の有様は、さながら藝術であります。その有様にはもとより華やかな所優しき所は少しもありません。その時代の『寒さ』『烈しさ』がヒシ／＼と顯はれ、覺者と

奇童との對照が類稀たぐひまれなる趣おもむきを成して居ります。私は拙ちやく筆を以て新小説にこの光景を一幕物に書きました。巧拙は評者に任す。唯斯る珍らしく且つ味深き史實を、誰かゞ拾つて藝術に仕組んで置かなくてはウソだと思つて書いたのであります。

云ひたい事はいろいろあります。五輪書も引用したる所の外にまだ澤山引きたい所があります。かの書の各條に就て説きたい事も限り無くありますが、他日に譲るとして、

寒流帶ヒ月チ澄シ如シ鏡。

の語を以てこの篇を結ばうと思ひます。これは武藏が常に書いた語であります。『山月苦如瘦。寒雲凍欲零』の語には白隱の内的風光がありくくと見えます。武藏のこの語には餘蘊なく彼の心景が描か

れてあります。

寒流帶ヒ月チ澄シ如シ鏡。

みくぬの乳

大正四年五月廿一日印刷  
大正四年五月廿四日發行

著者 沼波瓊音

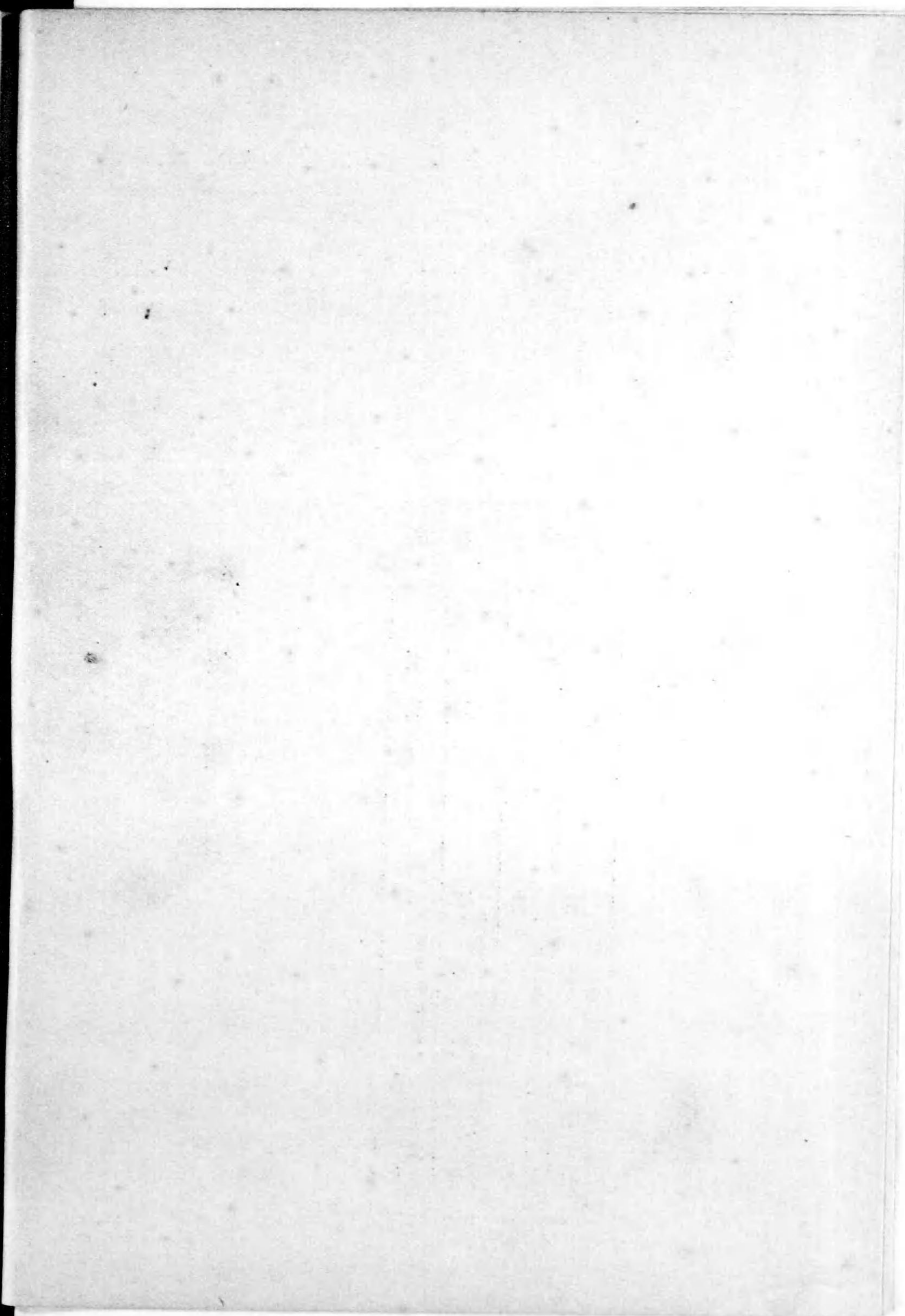
不許複製  
定價十六錢

發行者	村 上 靜 人 東京市港草區三間町八番地
印刷者	中 田 福 三 郎 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所	秀 英 舍 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
發行所	平 和 出 版 社 東京市麹町區三年町二番地

□發賣元

東京神田區表神保町  
(振替東京二七〇番)

東京堂書店





862  
687

終

